

## 平成26年度スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール研究実施報告（第4年次）（概要）

1 研究開発課題名	<p>5年一貫教育の特徴を生かした、看護専門職者を育成するための先進的なプログラムの研究開発～「豊かな人間性」「確かな知識・技術」「科学的思考・判断力」と「生涯学び続ける力」を育てるために～</p>			
2 研究の概要	<p>本校は、看護専門職者に求められる力を「生涯学び続ける力」と捉えている。「生涯学び続ける力」は、広い視野に立った看護観を育てることを目指した「豊かな人間性」、臨床に即した看護実践能力を育てることを目指した「確かな知識・技術」、看護の探求、研究的態度を養うことを目指した「科学的な思考・判断力」における各取組で身に付けた力を統合したものと考えている。その力は、変化する社会の中で新たな課題を発見し、自ら解決する力となるものである。</p> <p>これまでは、各取組における「育てたい力(身に付く力)」を明確にするとともに、効果的な育成方法について検討を重ねてきた。指定4年目となる今年度は、取組の主体が専攻科に移行しており、3年間で「身に付けた力」を活用しながら、さらに深化させることを目指して取組を行った。</p> <p>また、「身に付けた力（育てたい力）」を客観的に評価し、昨年度作成した「SPHで身に付く力～実習ルーブリック～」も活用しながら、生徒の成長を確認できるよう取り組んだ。</p>			
3 平成29年度実施規模	<p>全校生徒を対象に実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・SPH指定時入学生（平成26年度入学生、専攻科1年生）をターゲット学年とし、SPH活動全体の成果の評価の対象とする。</li> <li>・後続の学年(高校1～3年)は、継続して活動を実施した。</li> <li>・先行の学年(専攻科2年)は、トライアル学年として可能な限り実施し、ターゲット学年での実施の準備を進めた。</li> </ul>			
4 研究内容	○研究計画（指定期間満了まで。5年指定校は5年次まで記載。）			
4年次 (専1)	<p>豊かな人間性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・夏休み地域活動体験</li> <li>・ライフステージからみた生命倫理に関する授業</li> <li>・特別講座（人間関係論、他職種 of 専門家による講座）</li> </ul>	<p>確かな知識・技術</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ICTを活用した授業</li> <li>・学年に応じた技術の統合実践</li> </ul>	<p>科学的思考・判断力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・看護研究方法</li> <li>・看護研究ゼミナール</li> </ul>	<p>生涯学び続ける力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ヘルスプロジェクト「疾患を抱えていても自分らしく働き続ける方法を提案します」</li> <li>・キャリアプロジェクト</li> </ul>
5年次 (専2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ライフステージからみた生命倫理に関する授業</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学年に応じた技術の統合実践</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・看護研究方法（クリエイティブブリック、ケースダイアログブリックの活用）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリアプロジェクト</li> </ul>

	豊かな人間性	確かな知識・技術	科学的思考・判断力	生涯学び続ける力
育てたい力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会への参画力</li> <li>・事態への対応力</li> <li>・礼節</li> <li>・共有する力</li> <li>・時代の事象を見る力</li> <li>・情報の取捨選択力</li> <li>・自己決定力</li> <li>・状況判断力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報活用能力</li> <li>・学年に応じた看護技術力・知識力</li> <li>・臨地のイメージ力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・論理的思考</li> <li>・科学的視点</li> <li>・文献検索力</li> <li>・クリティカルシンキング</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イメージする力</li> <li>・課題発見力</li> <li>・課題解決力</li> <li>・コミュニケーション力</li> <li>・プレゼンテーション力</li> </ul>

### ○教育課程上の特例（該当ある場合のみ）

なし

### ○平成29年度の教育課程の内容（平成29年度教育課程表を含めること）

別紙参照

### ○具体的な研究事項・活動内容

「豊かな人間性」を育てる取組では、「ライフステージからみた生命倫理に関する授業」として3年前より、各領域で行われている生命倫理に関する授業を同時期に実施してきた。倫理的なジレンマを抱える事例を用いて、様々な立場に立って考えることを目標として行っているが、今年度は事例の提示の方法や、授業の進め方の工夫に重点を置いて取組を進めた。また、これまで希望者を対象として行ってきた「復興支援釜石ボランティア・スタディツアー」を、全員が震災学習や、災害について考える体験をするという目標のもとに、専攻科1年生全員が宿泊研修として宮城県に行き、多くの学びを得てそれを報告書にまとめた。

「確かな知識・技術」を育てる取組では、ICTを活用した授業や協調学習、シミュレーションの手法を用いたアクティブ・ラーニングによる授業が定着し、生徒が主体的に学習する姿が見られている。新たな取組として、生徒が看護技術の習得とその成長を自ら確認するツールとなるよう、学年毎に看護技術の到達度（ラダー）を作成した。これまで学年末に実施してきた実技テストや実技コンテストにおいて、身に付けた技術の到達度を振り返る機会を持つこととした。専攻科では、高校までに身につけた力を統合して実践する場面を設定した実技テストや、多重課題の演習においてシミュレーション教育の技法を活用した授業を行った。

「科学的思考・判断力」を育てる取組では、高校において文献検索や基礎的なデータ処理など初歩的な看護研究に関する学習を行い、さらに専攻科において、学習内容を活用する取組を行った。学術論文をクリティカルな視点で読む機会をこれまでよりも多く設け、食事による血糖変動実験を行った「サイエンスアカデミー」では、読んだ文献から仮説を立て、実験を行い、その結果を考察することを行った。「クリティークループリック」の評価では、クリティーク力が向上している生徒が学年を追うごとに増えている。専攻科2年生が実施する看護研究では、研究テーマを裏付ける文献を活用する生徒が多くみられた。

以上の3つの取組で身に付いた力を統合し活用する力である「生涯学び続ける力」を育てる取組では、プロジェクト学習を通してその力を育成しているが、昨年度同様、高校1年生から専攻科1年生までの各学年が実施するプロジェクト学習を定着させ実施することができた。今年度のプロジェクト学習では、特に対象をよりリアルに「イメージ化」するためにR10（リアル10）に力を入れ取り組んだ。専攻科1年生は、「夏休み地域活動体験」の一環として、地域で生活する人をよりリアルにイメージするために、地域のリサーチ活動を行った。また、今年度は、高校1年生、専攻科1年生の公開プレゼンテーションを、外部施設で行い、多くの来賓や保護者を迎え実施することができた。これにより、校外で実施する効果や異学年の交流の場としての成果が得られた。

## 5 研究の成果と課題

### ○研究成果の普及方法（普及状況については、可能な範囲で、他校・他地域への波及効果などを記載すること）

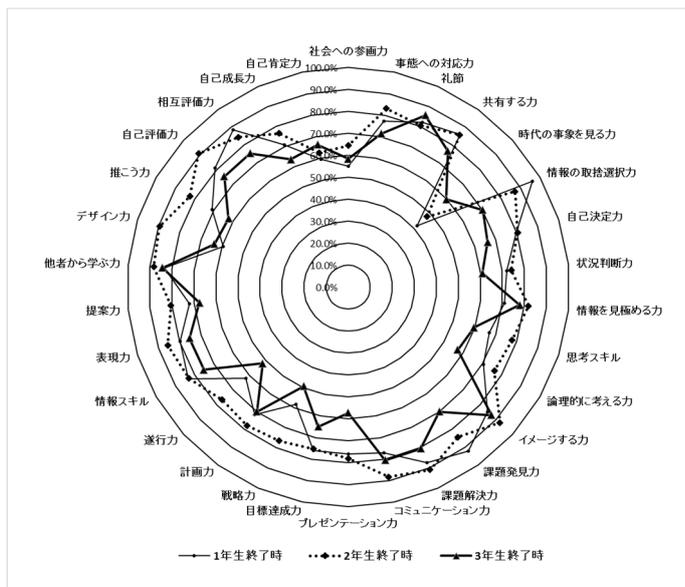
- ・次年度は、5年間の取組からそれぞれの柱の力を育てるための「看護専門職者を育成するための先進的なプログラム集（仮）」を作成し、全国に発信する。
- ・プロジェクト学習公開プレゼンテーション（平成29年9月30日プラザウエストにて開催）
- ・平成30年度全国看護高等学校研究協議大会での報告（平成28年度も報告）
- ・2018未来教育全国大会での報告（平成27～29年も報告）
- ・平成30年度全国産業教育フェア山口大会での報告（平成28年度も生徒が報告）
- ・平成29年度埼玉県×東京大学C o R E F未来を拓く学びプロジェクト 教科ミーティング（6月）、教科部会（1月）での報告
- ・リクルート発行の『キャリアガイダンス』に取組が掲載される（2017年12月号、p.52～55）
- ・埼玉県立総合教育センター発行の『埼玉教育』に取組が掲載される（平成29年度第6号）
- ・平成30年度に、照林社『プチナース』の取材を受ける予定

### ○実施による効果とその評価（数値や客観的なデータ等も用いながら記載すること）

#### 1. SPHによる取組の評価

##### （1）SPHの各取組における「育てたい力（身に付く力）」の目標値の変更

＜SPH指定時入学生（13回生）の「育てたい力（身に付く力）」の経年変化＞



本校では、昨年度まで鈴木敏恵先生の『総合的な学習プロジェクト学習ポートフォリオシート集』（教育同人社）の「プロジェクト学習で身に付く力30項目」をもとに、SPHの各取組において「育てたい力（評価の視点）」をあげ、目標値を設定して評価してきた。しかし、SPH指定時入学生（13回生）の3年間の自己評価による変化をみると、これまでの学年と同様に1年次よりも2年次の自己評価は高くなるが、3年次の自己評価は、どの学年よりも低くなるという結果が得られた。しかし、教員の評価として、生徒たちは自分のビジョン

やありたい像を自分の言葉で表現し、目標を設定したうえで、主体的に取り組むことができるようになったと感じている。以上のことから、「育てたい力（身に付く力）」の生徒による自己評価は、SPH活動において、その成長を適切に反映しているとはいえないと判断し、SPHの各取組における「育てたい力（身に付く力）」で設定していた目標値による評価を終了する事とした。今後は、「育てたい力（身に付く力）」による目標値を設定した評価は行わないが、評価の観点として継続していくものとする。SPHによる成長を相対的、客観的に評価するものとして、昨年度作成した実習ルーブリックを活用していく。

##### （2）12回生（SPH先行学年）の経年変化をもとにした13回生（SPH指定学年）の変化の予測＜専攻科1、2年生の自己評価による実習ルーブリックの平均点＞

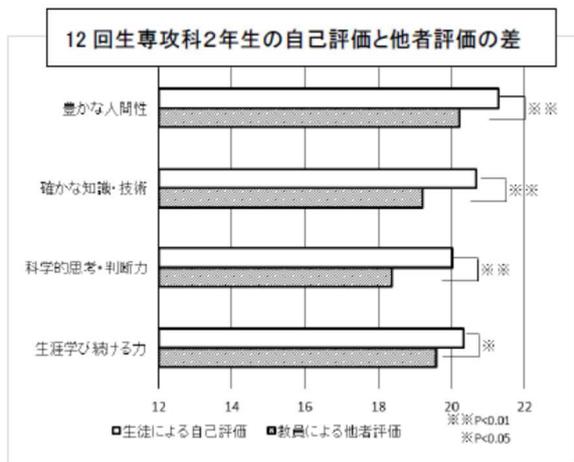
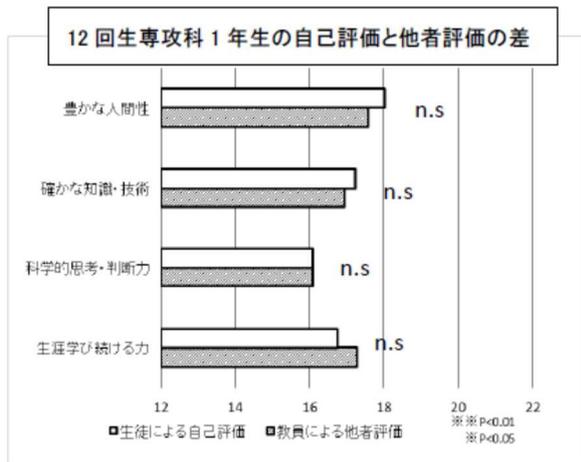
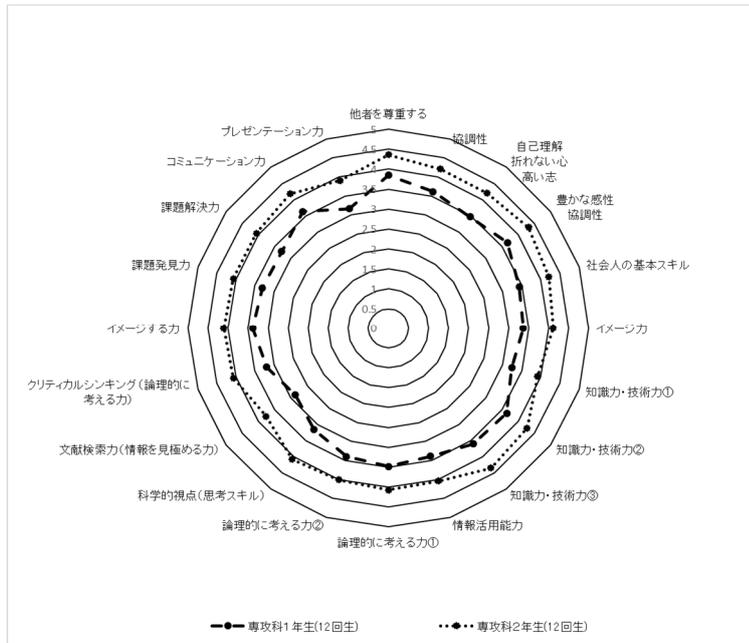
SPH指定時の入学生の先行学年である12回生の専攻科1年生、2年生の臨地実習終了時の実習ルーブリックの平均点の変化を比較した。分析には、統計解析用ソフトウェア IBM SPSS

Statistics version22 を使用した。

専攻科1年生の臨地実習終了時(3月)に比べて、専攻科2年生の臨地実習終了時(11月)の自己評価は、すべての項目で有意に自己評価が高くなっている(p<0.01)。また、ほとんどの項目で「4」を超えた平均であり、専攻科2年生終了時の目標値である「5」に近づいている。これは、学内の授業に加え、専攻科での約12週にわたる臨地実習で学習を積み重ねた結果であり、加えて、この力を身につけさせるためのSPH事業の成果であると言える。この自己評価の上昇は、生徒達が5年間の学習を積み重ねた達成感を得たことで、自己肯定感が高まると予測される。また教員による他者評価においても看護専攻科1年生終了時よりも専攻科2年生の実習終了時の方が

すべての項目において有意に高くなっており、客観的にも生徒の成長が伺える結果となった。

次に、下のグラフは、4つの柱ごとに見た、自己評価と他者評価の差をグラフにしたものである。専攻科1年生の実習終了時は有意な差がなくほとんど一致していたが、専攻科2年生の実習終了時では、すべての柱において有意に自己評価の方が高かった。これは、専攻科1年生では、次学年からの本格的な臨地実習を控え、自分の課題を客観的かつ冷静に評価した結果であるが、専攻科2年生では、すべての臨地実習を終え、修得できた達成感をふまえて



評価した結果であろう。一方で、教員の評価が低かったのは、本校修了後に看護師として就職する上で、看護職の専門性を考慮し、まだ課題のある生徒の現状を冷静に評価した結果であると考えられる。この実習ルーブリック評価は、高校3年生終了時を「3」、専攻科2年生終了時の目標値を「5」と設定して作成したものであるが、教員による他者評価がほとんどの項目で「4」を下回る結果になったのは、教員の評価が「3」を標準(可)と設定した普段の実習評価と連動してしまった可能性がある。評価の視点については、生徒・教員ともに、統一する必要がある、そうでなければ実習ルーブリック評価後の面談の成果が十分に得られない。今後は、教員の評価の視点を再度検討し、統

一する必要があると考える。

## 2. 主な取組の効果と評価

### (1) 豊かな人間性を育てる取組～ライフステージからみた生命倫理に関する授業～

3年前より命の問題について考え、自分の意見を持ち看護観を養う事を目指した取組を行っている。生徒が「命の大切さや倫理上の問題」について領域間で関連づけて意識できるように、看護科目の各領域の中で生命倫理を扱う単元の授業を同時期に配置している。専攻科1、2年生ともに「秋の倫理月間」として定着しつつある。各ライフステージで生じる生命倫理に関連した問題について学び、倫理的ジレンマを感じられる様に事例を用いて自分の事として考え、自分なりの意見を持つ事を目指して授業を組み立てている。1年目は視聴覚教材など事例を用いて倫理的なジレンマの視点を作りそれぞれの立場で考えるようになること、2年目は、生徒が倫理的ジレンマを感じ、グループワークを通して自分の意見を持つこと、3年目は、臨地実習での経験をふまえ、より考えを深め、看護観形成につなげることを目指して授業づくりに取り組んだ。

4年目となる今年度は専攻科2年生において、授業全体のまとめとして「自分が臨地実習で感じたジレンマの場面」について考えるグループワークを行った。5年間の臨地実習の場面で、生命倫理に関してジレンマを感じた一場面を上げもらい、似たようなキーワードをもとにグループ分けをした結果、10項目のテーマに分けられた。テーマごとに似たようなジレンマを感じたもの同士が集まるようにグループを編成し、グループワークを行った。一人一人がジレンマを感じた場面を紹介し、「事例に対しての対応策」や「他の人の話を聞いて考えた事」について意見交換し、そこから考えた「倫理的にジレンマを感じた時に大切な視点」を一人ずつラベルに記入し、ラベルワークを行った。意見交換ではジレンマを感じた時の気持ちの揺れや葛藤などを話している者もいた。自分と同じジレンマを持つ生徒同志で話し合ったことで、思いが共有でき、過去の経験を前向きにとらえられるようになった結果と考えられる。そして、患者のために自分の思いを話すことが重要と、カンファレンスの必要性に気づいている生徒もみられた。

#### 自分が臨地実習で感じたジレンマの場面

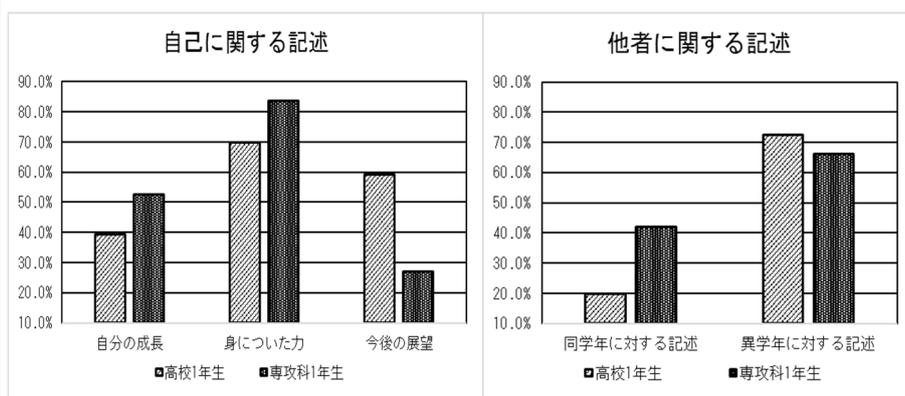
- ①終末期の患者さんの最後の願いを叶えられずどうしたいか困った。
- ②死を前にした患者さんの不安などの言葉にうまく答えられなかった。
- ③家族の不安な言葉に何と答えてよいかわからず困った場面。
- ④患者が治療の選択をしたが、それについて意見を求められ何といたらいいか困った。
- ⑤何かしたいけど学生では対応できないことから困った。
- ⑥聞かれたことにうまく答えられなかった。
- ⑦患者が移動・抑制をはずすなど、学生であるために、希望を叶えることができなかった。
- ⑧患者のためのケアだったのか。自分のためのケアになっていないか。
- ⑨患者さんに行ってほしいことをうまく促すことができなかった。  
(患者の希望を優先してしまった)
- ⑩患者の尊厳が守れたのか。(後悔がある)

ラベルワークで出たキーワード	育てたい力
患者家族の状況を把握する、共感すること、傾聴すること、寄り添う事	時代の事象を見る力
情報提供、共有の大切さ	情報の取捨選択力
本人の希望の尊重、自分の看護観・意見をもつこと、家族の気持ちの尊重、患者に合わせる事、気持ちを伝える事	自己決定力・ 状況判断力
他者の意見を聞いて安心できた、苦悩・ジレンマを感じてもよい	その他

生徒がまとめたキーワードをこの取組において育てたい4つの力の内容に分類した。様々な考え方があり、それらを尊重することの重要性や状況に応じた判断力をつけるなどの「自己決定力」や「状況判断力」に関する力が養われたと考える。今後は、他者を尊重しつつ、自分の核となる思いはぶれることなく、対応する力へとつなげたい。そして「時代の事象を見る力」は、事例を提示するという現在の授業方法では限界があるため、臨地実習で経験を積むとともに、授業で学んだ内容を振り返りながら育成していきたい。

## (2) 生涯学び続ける力を育てる取組～「公開プレゼンテーション」による異学年交流の効果～

昨年度のプロジェクト学習の評価では、プロジェクト学習で育てたい5つの力（身に付く力）は学年を追うごとに定着しており、また、プロジェクト学習における異学年交流は効果が高いと考えられる。今年度は、異学年交流による効果を生徒の自由記述の内容を抽出し、記述のある生徒の割合を分析することとした。抽出の視点として、記載の中には、自己や他者に対することがあることから『自己に関する記述』と『他者に関する記述』の2つに分け、さらに『自己に関する記述』では、達成感など自己の成長に関する記述を「自分の成長」、身に付いた力に関する具体的な記述を「身に付いた力」、次年度の課題や抱負に関する先を見すえた記述を「今後の展望」とした。SPHでは、何のために「どのような力を身に付けるのか」という事を常に意識して取組を進めてきたことから、あえて、「自分の成長」と「身に付いた力」を分けて抽出した。『他者に関する記述』では、チームや集団としての自己の振り返りに関する記述を「同学年に対する記述」と先輩へのあこがれや自己の成長の振り返りを表す記述を「異学年に対する記述」とした。



SPH指定時入学生（専攻科1年生）は、高校1年生に比べると、「自分の成長」や「身に付いた力」に関する記述をした生徒の割合が多くなっている。異学年に対する記述では、高校1年生は先輩へのあこがれなど、自分の目指す姿

をイメージした記述が多かった。また、専攻科1年生の他学年への記述からは、自分たちが今まで通ってきた道を振り返りながら他者を見て自分の成長を客観視できていると考えられる。

毎年、各学年が同じ題材で取り組むことで、個々の生徒が他の学年を見て、自分の成長段階に気付くことができた。このことが異学年交流の成果であると考えられる。対象を俯瞰し、自分自身を客観視する力が育っている。今までも縦の繋がりを活かせるように異学年交流をしていたが、5年一貫であるという環境の中で後輩を思いやる気持ちや、後輩に対して肯定的評価ができるのは他者や異学年を客観的に見ることができ自分が成長したからこそ感じられるのだろう。また、外部との交流や校内だけでなく外へ発信することにより広い視野をもつことができ、公開プレゼンテーションを地域の施設を借りて実施した。さらに、来賓（病院関係者など）から直接評価をしていただいたことにより、生徒のモチベーションが高まり、自らの将来像を具体的にイメージできるとともに、異学年交流によって自分の成長に気付く等の成果が得られたと考える。

### ○実施上の問題点と今後の課題

本校のSPHは4年目となり、SPHで「育てたい力（身に付く力）」を養うための、5年間の取組の成果が見えてきた。「SPHで身に付く力～実習ルーブリック～」での評価も、生徒の成長を可視化して確認できることが分かってきた。今後は、ターゲット学年の高校生からの成長を評価していく予定である。

次年度は、指定最後の年であり、「豊かな人間性」「確かな知識・技術」「科学的思考・判断力」「生涯学び続ける力」それぞれの力を育てる5年間の取組に対する総括を行い、シラバスに取入れたものの評価と、指定終了後に継続する取組について内容の精選を行っていく。そして、4つの柱が目指す力を育てるための5年間のプログラムを提案し、全国に発信できるように研究を進めていきたい。